

「底が突き抜けた」時代の歩き方 297

アメリカは一体、ベトナムに何をしにやってきたのか

－ 映画『地獄の黙示録』

79年に製作され、翌80年に日本で公開されたフランシス・コッポラ監督の『地獄の黙示録』(オリジナル版)に、53分間の未公開フィルムを新たに加えて再編集された『地獄の黙示録 特別完全版』が、01年5月11日、カンヌ国際映画祭でコンペ外の特別招待作品として上映され、8分間にも及ぶスタンディング・オベーションをもって迎えられた。この22年ぶりの特別完全版がカンヌ国際映画祭で初上映されたのは、オリジナル版が79年のカンヌ国際映画祭に出品されて、フォルカー・シュレンドルフ監督の『ブリキの太鼓』とパルム・ドールを分け合い、興行面でも成功を収め、多くの人々に評価され、クラシックとまでいわれるようになる経過があったからである。そしてこの特別完全版は、同時中枢テロ以降の現実の中で公開された。

実は、79年のカンヌ国際映画祭で上映されたのは、完成前の「作業中のプリント」だった。映画『ゴッドファーザー』でアカデミー賞を獲得したコッポラ監督が、『地獄の黙示録』の製作に着手するのは、73年のベトナム戦争終結から三年後の76年3月であった。当初は4ヶ月の予定であったが、実際には15ヶ月にも及び、77年5月まで掛かった。それから編集に二年あまりの時間が掛けられ、79年8月の一般公開の3ヶ月前の5月にカンヌ映画祭に、未完成版のまま出品されたのである。製作資金が膨大に重なる一方で完成が遅れ、マスコミがこぞって『地獄の黙示録』はいつ完成するのかという記事を書き立てるなかで、カンヌ映画祭のジル・ジャコブ現会長の力で、未完成のままのコンペ作品が実現されたのだ。

今回の特別完全版のストーリーはこうである。

ベトナム戦争真っ盛りのサイゴン(現在のホー・チミン市)のホテルの一室で泥酔している、陸軍情報省所属のウィラード大尉(マーティン・シーン)は情報部に呼び出され、ある特命を与えられる。カンボジアの特殊任務に赴きながら、軍隊の規律から完全に逸脱してジャングルの奥地で自らの牙城を築き、アメリカ兵や外国人の傭兵、村民まで巻き込んで私兵集団を作り、王のように君臨して殺戮を繰り返しているカーツ大佐(マーロン・ブランド)を抹殺せよ、という秘密の任務である。若い大尉はカリフォルニア出身の伝説のサーファーであるランスら4人の部下を引き連れて、ジャングルの奥地へと川を遡っていく。その途中で、ワーグナーの「ワルキューレの騎行」をガンガン鳴らしながら、軍事ヘリで村を攻撃する好戦的なキルゴア中佐(ロバート・デュバル)の軍団と出会う。銃弾が飛び交う先頭の最中にランスに浜辺でサーフィンをやってこいと命じる狂気の中佐が、ナパーム弾でベトナムの村を焼き払う一方で、村民の子供の命を懸

命に救おうとする異常な光景を目撃する。

そこを離れた一行は、更に川を遡り、奥地へと向かっていく。機首を川に突っ込んで墜落している米軍の戦闘機を見かけたり、ベトコンではない原住民のイフガオ族に猛毒の毒矢で襲われたりしながら、どんどん奥地へ進んでいく。やがて一行は有名なロックのプロモーターが催す慰問団に遭遇する。スージーQの曲が流れる巨大な仮設舞台に、ヘリから次々と下りてくるプレイボーイのグラビアを飾るプレイメートたち。ストリッパーのように腰をくねらせ、露出する肢体でセックスアピールを強調するプレイメートたちに、興奮した兵士たちが舞台に殺到してコンサートは中断される。

そんな混乱を潜り抜けて、一行は奥地へと川を遡っていく。いよいよカーツ大佐のいるカンボジア領に近づいた頃、フランスの私兵集団に出くわし、1887年以来インドシナ半島を領有していたフランスが第二次世界大戦後、ベトミン軍に敗れて撤退した後も残留しているフランス人農園主が作り上げてきた、まるで中世の荘園さながらのジャングルの中の小さな王国に案内される。招待された大尉は戦場の混乱や恐怖から掛け離れた優雅な食事をフランス人たちと共にし、美しい未亡人と一夜のベッドを過ごす。

そして遂に大尉とただ一人生き残ったランスは、カーツ大佐の狂気が支配している密林に忍び入り、ジャングルのあちこちに生首が晒され、裸の原住民がうごめく、凶々しく目を背けたくなる、残虐で異様な王国に踏み入っていく。彼らの前にゆっくりとカーツ大佐が姿を現わし、大尉は拘留され、ランスは原住民の中にすっかり溶け込んで、自分を見失っていく。カーツ殺しの任務をやがて果たした大尉は、原住民の中からランスを連れ出し、彼と一緒に村を去っていく。

さて、今回特別完全版で新しく挿入された個所は、フランス人の植民農園のシーンであり、また兵士たちに襲われたプレイメートたちがヘリコプターの燃料切れで、川の上流にある辺境の基地で立ち往生している時に大尉の一行と出会い、彼女たちの若い妖艶な肉体と燃料との、というより、お互いに必要としている燃料を交換し合うシーンであり、更に金属製の檻に閉じ込められた大尉にカーツが、戦争の狂気に対する彼の考えを仔細に渡って説明するシーンである。そして奥地へと川を遡っていく一行の5人が、船の上で冗談をいいあったりする男の友情が描かれているシーンである。

プレイメートたちと一行がお互いの燃料を交換し合う性的なシーンは、大尉とフランス人入植地の未亡人との束の間の一夜のシーンと共に、(ヘリに手榴弾を投げ込むベトコンの女戦士や、木造船で虐殺される一般女性、更には、戦争映画には付きものの、手紙、写真、録音テープのかたちをとって登場してくる遠い故郷の母、妻、恋人などの女性を背景に置いて)死と隣り合わせにあるエロスの部分が強調されることによって、物語に厚みが加えられることになったが、それだけではない。男どもが狂ったように殺し合う戦場の中に、確かにはかないながらも、男だけの眼ではない、女の眼が差し込まれている重層性も感じられる。女の眼は「殺すあなたと愛するあなた」とか、「獣なのか、神なのか」という言葉を伴って、どちらかの極を揺れ動くしかない男の愚かな限界と、その男の愚かさ引きずられていく女の哀しみをくっきりと浮かび上がらせているのだ。

特別完全版の功績は、かつてのフランス植民地の遺制のような、小じんまりと閉ざさ

れた小宇宙の体裁を整えている農園シーンのまとまった個所を付け加えることによって、何よりも顕著となっている。このシーンが挿入されることによって、共産化の毒の脅威に晒されているベトナムを救うために、西側の代表としてアメリカが止むをえず遠いインドシナにまで軍隊を送らざるをえなくなったという、ベトナム戦争の神話を地上に着陸させる歴史的なプロセスが掘り起こされたのである。カーツ殺しの任務しか頭のない大尉にむかって、農園主のフランス人は容赦なくこう浴びせかける。「私たちは、なぜここに留まっているのだろうか？ それは、私たち家族を一つにまとめておくためだ。私たちは、私たちが持っているものを守るために戦っている。しかし、君たちアメリカ人は、大いなる幻想、実態のないもののために戦っているんだよ」

どうしてお前たちアメリカ人は、ここにいるのか？ 自分たちフランス人はここに古くから住みついて、自分たちの土地も持っている。自分たちにとって、ここが故郷だから戦っている。だがお前たちアメリカ人には、どこにも戦う理由がないではないか。お前たちのやっていることは、単にベトナム人を殺しているだけではないか。フランス人は大尉にむかって、そういつているのだ。何の根拠もなく人を殺している。その問いは、まさしくカーツ殺しを命じられている大尉自身に突きつけられた問いにほかならなかった。一人一人の兵士たちは自分に殺す理由を持っていないのに、単に命じられたからといって戦場に放り込まれて、殺し合う愚行を果たしていく。同様に大尉もまた、縁もゆかりもない、しかも味方である筈の同じアメリカ人将校であるカーツ殺しを命じられて、自分に殺す理由が全くないにもかかわらず、彼の許へ赴く。大尉のカーツ殺しはベトナム戦争を舞台に、ベトナム戦争の本質を抉り出しながら、カーツ殺しの自分にとっての理由を探し求める旅であると同時に、カーツの狂気に象徴されるベトナム戦争そのものの狂気にまで止めを刺そうとする意図を孕んでいた。

共同編集者のウォルター・マーチは01年5月11日のカンヌ映画祭のコッポラ監督との共同記者会見で、興味深い発言（映画パンフ収録）を行っている。《フランスのインドシナ支配の他にも、新たな植民地主義がある》なかで、《当時のソ連との場所取りゲーム、どの国がどの国を取って、どれだけ優位に立つかというゲーム。その結果、アメリカが過去に何ら繋がりを持たないベトナムに存在することになるんだ。/この映画ではフランス人は、一種幽霊のように描かれている。突然現れたかと思うと、存在感を増し、オロール・クレマンとのラヴ・シーンを境に、また消え去ってしまう。「本当に存在したのか?」。これが問いかけなんだ。フランス人は、部隊の一人が最初に殺された後に登場する。（中略）この部分は死についての問いかけなんだ。人間の死と、過去からの亡霊が交錯している。フランスもアメリカもベトナムに存在するということでは同じだが、一つ大きな違いがある。「どうしてアメリカ人がここにいるんだ?」ということだ。》

フランス人はすでにベトナムから消え去ったのに、「どうしてアメリカ人がここにいるんだ?」ということなのだ。「過去からの亡霊」にすぎなくなっているフランス人から何も学ばずに、アメリカもまた、「過去からの亡霊」として存在しようとしているという問いかけがここで作られている。しかしながら、「過去からの亡霊」のよう

なアメリカの砲撃で、「過去からの亡霊」ではけっしてありえない現実の生身の人々が膨大に殺されていかねばならない無惨な悲劇に、世界はいまでも、いまま、これからもずっと、直面しつづけなくてはならないのだ。いや、だからこそ、映画はけっして実在しない、「過去からの亡霊」のようなフランス人を登場させて、「どうしてアメリカ人がここにいるんだ?」という、歴史的なプロセスに内在する問いを投げかけているのである。

ベトナム戦争が引きずってきている歴史への視線を映画は内在しているので、ベトナム近代史を手短かに素描しておく、まず1800年代初頭から、ヨーロッパ列強は東南アジアの植民地化を企て、干渉を始めていた。フランス人宣教師迫害事件を口実に、フランスが1858年にダナンを攻撃し、翌59年にサイゴンを占領。その後も各地を占領して、84年にベトナム全土がフランスの手中に落ちた。87年には、ベトナム、ラオス、カンボジア一帯が、フランス領インドシナ連邦として成立し、植民地にされてしまう。映画のフランス植民農園はこの時代に由来しているのだろう。

フランスの侵略と支配に対するベトナム人民の抵抗は、当然激しく繰り返され、1920年代後半に盛り上がってきた労農運動を背景に、ホー・チミンの指導の下に30年、インドシナ共産党が結成され、35年以降、反仏・民族解放独立運動が展開されていく。映画『愛人ノラマン』(92・仏=英)や『インドシナ』(92・仏)は、この頃のフランス領ベトナムを舞台にしている。

39年にヨーロッパで第二次世界大戦が勃発し、翌40年にフランス本国がナチス・ドイツに降伏してからは、ドイツの同盟国である日本軍がインドシナにまで侵略してきたために、ベトナムはフランスと日本の共同支配となった。そのような状況下の41年、インドシナ共産党を中心に民族統一戦線ベトナム独立同盟(ベトミン)が結成され、抗仏運動と共に抗日運動も激しく展開される。41年末のパールハーバー以降、日本と戦争状態にあったアメリカは、このベトミンに軍事物資の支援やゲリラ戦の指導を行った。ドイツの敗戦が濃厚になった45年4月、共同支配の関係を保っていたフランスと日本が決裂し、日本軍はフランス植民地軍を武装解除して、単独でインドシナを掌握する。ベトミンの抗日戦が激化する中で、日本の敗戦が決定的になった8月、ベトナム人民は全土で一斉蜂起し、日本軍から権力を奪還して、9月2日、ベトナム民主共和国の独立を宣言する。

ところが、日本軍の武装解除のためにインドシナに進駐したイギリスを中心とする連合軍が、フランスの再植民地化を容認する態度をとったことから、ベトナム民主共和国は民族独立を掲げてフランスとの交渉による解決を図った。しかし46年6月、フランスは協定を無視してベトナム南部に自治政府を樹立し、民主共和国政府と敵対関係を取り始めた。そのため46年12月20日、インドシナ戦争が勃発することになった。フランス軍の近代兵器に対するベトミン軍のゲリラ戦術で戦いは長期化し、フランス軍はベトミン軍との真っ向からの対決を画策する。53年11月、ベトミン軍の後方に位置するディエン・ビエン・フーの盆地に、フランス空挺部隊が落下傘降下して陣地と飛行場を建設し、ベトミンが反撃してきたところを圧倒的火力で一気に殲滅させる作戦を計

画していたが、ベトミン軍はその策の裏をかくて、フランス軍の本陣とディエン・ビエン・フー基地とを分断させる包囲戦に打って出、54年5月7日、ディエン・ビエン・フーは陥落。フランス軍は敗退した。

54年7月、インドシナ戦争が休戦、ジュネーヴ協定が締結され、ベトナムの南北分割が決定される。フランスが成立させた南ベトナムの自治政府が49年6月、フランスによる傀儡政権のベトナム国になっていたのも、共産圏のベトナム民主共和国の領土拡張を嫌う英米の主導下で、北緯17度線を境にして南のベトナム国と北のベトナム民主共和国に分割されたのである。そして全面撤退したフランスに取って変わって、アメリカがベトナム国に介入してくることになる。ところでジュネーヴ協定では、二年後の56年7月の総選挙で南北ベトナムは統一されることになっていたが、アメリカの支援の下にベトナム国の政権を握ったゴー・ディン・ジエムが、ベトナム民主共和国政府からの統一総選挙実施の申し入れを拒否し、55年10月、ベトナム共和国の成立を宣言して、自ら初代大統領に就任したことにより、ベトナムは完全に北のベトナム民主共和国と南のベトナム共和国とに分断された。

熱心なカトリック信者で極端な反共・親米主義者のジエムは、アメリカ軍を南ベトナムに招き入れる一方で、ベトミン軍兵士やインドシナ戦争中の抵抗運動の闘士とその家族、祖国統一を要求する人々、キリスト教徒以外の仏教徒などの宗教家を弾圧し、彼の一族による独裁政治を推し進めたため、民衆の怒りと反発は高まるばかりであった。59年に反対運動が農村を中心に南ベトナム全土に広がり、60年に南ベトナムの首都であるサイゴン政府の地方行政機構を打破する一斉蜂起運動にまで発展、12月20日、南ベトナム民族解放戦線（ベトコン）が結成され、内線が激化する。当初は軍事顧問団派遣と武器供与のみの援助を行っていたアメリカは61年1月、サイゴン政府の危機に軍事行動を開始し、7千人を出兵してベトコン対アメリカ軍、南ベトナム政府軍の闘いが始まった。

ベトコンがアメリカ自身による軍事物資の支援やゲリラ戦指導を行ったベトミンの末裔であることを考えると、同時中枢テロを契機にアメリカが敵と名指して報復爆撃を行ったビンラディンやアルカイダ組織が、かつてアメリカ自身が対ソ連の戦略的な位置づけから軍事物資の支援や軍事技術の提供を行ったのと全く同じ構図であることに気づく。アメリカは相も変わらず自分にやがて刃向かうことになる敵を、自ら育てるという愚行を繰り返しているのである。逆にいうと、自らが育てた組織や集団の面倒を最後までみることなく、彼らがやがて刃向かわざるをえなくなるようなかたちで、アメリカは用済みとして非情にも打ち捨ててしまうということだ。

アメリカの軍事介入の効果なく、解放区はますます広がり、64年には人口の4分の3に当たる800万人が、サイゴン政府の支配を脱していた。63年11月、ジエム政権がクーデターで崩壊し、67年のグエン・ヴァン・ティエウ政権成立まで、クーデターが相次ぐ状態で、内政は崩壊に瀕していた。64年8月2日、トンキン湾の海上でアメリカの駆逐艦マドックスが、北ベトナムの魚雷艇に魚雷攻撃を受けるという事件が起こった。被害はゼロだったが、北ベトナムの主張では、領海侵犯をしたアメリカ駆逐艦

を魚雷攻撃によって領海外へ追い出したのだといい、マドックス号は公海上で攻撃されたと証言し、領海の範囲の解釈をめぐって双方の主張は食い違った。そして二日後の8月4日、北ベトナムの魚雷艇が、一方的にマドックス号ともう一隻の駆逐艦に再度攻撃を仕掛けたとの報告があった。この第二次トンキン湾事件を口実に、当時のアメリカ大統領ジョンソンは北ベトナムへの報復攻撃を命じ、翌5日に北爆が開始されて、北ベトナム相手の戦争が本格化していった。

アメリカ側には韓国、タイ、フィリピン、中華民国、オーストラリア、ニュージーランドが参戦し、北ベトナム側には中華人民共和国とソヴィエト連邦が付き、中華人民解放軍兵士が参戦した。要するに、ベトナム戦争はソ連、中国の社会主義対アメリカ資本主義の様相を帯び、67年にはアメリカの投入兵力が50万人にも達して泥沼化していった。B52の北爆、ナパーム弾や枯葉剤、戦闘ヘリコプターにミサイル、対人地雷等のアメリカによる最新兵器が駆使される一方で、ジャングルや水田地帯での歩兵戦や、都市でのゲリラ戦は日常化し、戦闘は全局面に渡った。映像メディアの進出によって、戦争報道も内容、頻度、範囲、多角化の点でこれまでにないレベルに達した。反戦平和運動も全世界的な規模でラディカルに展開され、フォークソング、ロック・ミュージック、アンダーグラウンド・シネマ、サブ・カルチャーの分野に、多大な影響を及ぼした。

アメリカが軍事介入してから12年後の72年2月、当時のニクソン大統領が訪中して、中国と和解、5月、モスクワで開かれた米・ソ首脳会議でソ連との和解という経過を辿って、戦闘相手の北ベトナムを無視したまま、アメリカはベトナムから撤退を始めた。翌73年1月、アメリカと北ベトナム間での和平交渉が成立した時点で、アメリカにとってのベトナム戦争は終結し、つまり、アメリカは敗北した。その後も、北ベトナム軍と南ベトナム政府軍の戦闘は続行したが、サイゴンが陥落した75年4月30日、南ベトナムの降伏によって国家は統一され、サイゴンはホーチミン市の名称になった。後に、北爆開始のきっかけとなった第二次トンキン湾事件は、アメリカ軍部のでっちあげであることが判明し、軍の報告を疑っていたジョンソン大統領も、間近に迫った大統領選出馬のために北爆に踏み切ったことが明らかになっている。

以上のベトナム戦争に至る歴史的経過の記述の多くを、『キネマ旬報』（02年1月下旬号）収録の鶴田浩司という人の文章に負っているが、映画パンフには、多くの資料が公開されるようになって、北ベトナム政府と南の臨時革命政府との間で対立・抗争が存在していたことや、「ソ連や中国による共産主義の浸透」や「アメリカ帝国主義の侵略」といった図式やスローガンに収まりきれない複雑さが示唆されている。そこから窺われるのは、北ベトナムもアメリカも共に、ベトナム共和国及び南ベトナム社会体制に驚くほど無知だった点である。最後に、アメリカが1500億ドルの巨費を投じたベトナム戦争の死者を挙げておく。南ベトナム軍 - 18万5528名、南民間人 - 41万5千名、北・解放戦線軍 - 92万4千名、北民間人 - 3万3千名、アメリカ軍 - 5万7702名、韓国軍 - 4407名、オーストラリア軍 - 475名、タイ軍 - 350名。

2002年4月15日記